

# 『ある貴婦人の肖像』

## —ラルフ・タチェットの病氣と疎外

大江 充

### 序論

ヘンリー・ジェイムズ (Henry James, 1843-1916) の長編『ある貴婦人の肖像 (*The Portrait of a Lady*)』(1881) (以下『肖像』) に登場をする、病人ラルフ・タチェットの心理を考える。『肖像』は主人公イザベル・アーチャーの意識を通して描かれた小説であり、脇役であるラルフの内面を知ることが困難である。彼の心が直接描かれることはなく、登場する場面も限られているからだ。そうした彼の立場と役割を明らかにしながら、イザベルの心を描いた『肖像』を用いて、病人ラルフの心を読んでみたい。

ラルフの心理が存在する、内面の位置を確認する。自分の中に遠慮なく侵入し、「喜んで掃除をして整理整頓をしようとする」(PL 61) <sup>1</sup>イザベルに閉口し、ラルフが心の奥の「プライベートな一室」(PL 61)の存在をほめかす場面がある。「イザベルがその私室に入るには、従兄が控えの間と呼ぶ部屋を通る」(PL 61) 必要があり、そこにはラルフの雇ったバンドが常駐している。彼らは常に演奏し続けることを命じられており、「私室に世間の音が届かないよう、世間には中でダンスを踊っているように思わせている」(PL 61)。外からは始終踊っている楽しい人物に見えても、ラルフ本人の心はその奥の、外の音が届かない静かな私室に存在しているのだ。

ラルフの本心が、表面上の態度や言葉に装飾なく表れることは驚くほど少ない。「控えの間」のバンドはダンスミュージックを鳴らし続けている。

巧みに奏でられた、複雑で軽快なこの音楽は、人を遠ざけるラルフの冗談の隠喩である。イザベルの侵入を阻むのは「宙に漂うような軽快なワルツで、その絶え間ないフィドルの音に彼女はしばしば苛立っている」(PL 61)。いつも冗談を繰り返し、質問をはぐらかす彼の態度は、「大変なペテンみたい」(PL 62)と不誠実、不真面目な印象を彼女に与える。また「英語で一番大事な二つの言葉はイエスとノーです」(PL 235)と考えるラルフの母、リディア・タチェットは、言葉のあやが多すぎる息子の言い回しを嫌い、「まるでジグを踊っているよう」(PL 235)と彼をにらむ。音楽は不快さを伴うほどに軽々しく、例えや抽象的な表現ばかりで難解である。ラルフの本心は、その絶え間ない音の鳴る先に存在するのである。

ラルフの冗談は「私室」を守るための防衛手段である。人を煙に巻くその態度が最も顕著に見られたのは、「ドアをロックせず入り込んでくる」(PL 87)不法なアメリカ人記者、ヘンリエッタ・スタックポールと対峙した時であった。彼女の遠慮のない態度に「困惑させ、侵害をされた、名誉を損なわれたような気分になった」(PL 80)ラルフは、「心は数日前まで持っていたのですが、もう奪われてしまいました」(PL 85)、「あなたが独身であることはむしろ好都合です」(PL 86)、などと軽口を連発する。有閑階級の生活を責める彼女の愛国的質問と、対する彼の軽口の応酬は夫婦漫才のようで可笑しくさえある。しかしながら、それは彼の困惑ゆえの行動であり、私室に他人を入れまいとする、ラルフの必死な抵抗であったのだ。

ラルフの意識には「私室」、「控えの間」と、それ以外の「外」の三つの世界があったが、その区分には彼の深刻な病気が大きく関係している。それぞれの距離の大きさは、病の進行に比例して大きくなっていくからだ。元々健康体であった以前のラルフは、発病して「体に気をつけなければならなくなった自分を、自分とは何の共通点もない、退屈で無関心な人物」(PL 45)と考えている。ところが闘病生活が長引くにつれ、「とうとうラルフはその[病気の自分である]人物に渋々の寛容と、表には出さない敬意を払うようになる」(PL 45)。そして突如病が悪化し、療養先へ「ほとんど死んだも同然でたどり着き、生死の境をさまよった」(PL 45)後、「自分を卓

越させる野望を諦めざるを得ないなんて、そんなこと考えることもできない、そう思っていたのはずいぶんと昔のこととなった」(PL 46)と、人生の全ての希望を諦めてしまう。ラルフは病気を受け入れるとともに、自分が「何の共通点もない」と考えていたような、以前と全く異なる「病人」になったことを自覚している。

スーザン・ソントグは「生まれた者は健康な王国と病気の王国の市民権を有する」(3)と世を二分したが、『肖像』におけるラルフは健康な人々との繋がりのない、病気の世界の住人である。長くヨーロッパに住み続けるアメリカ人、マダム・マールが「もし病気がなかったら、他に何か彼を示せるものがあるでしょうか」(PL 171)と述べるように、彼の特徴は病気であることしかない。仕事も結婚もしておらず、母国アメリカやヨーロッパなど、特定の国に定住することもない彼は、自分の内面の「外」の世界と決別をした、病の世界の住人である。

ラルフが「病人」として、周囲とは別の世界を生きたことには特別な意味があった。現実の世界と繋がりを持たない彼は、慣習や価値観、常識といった、他の人物が守る様々なルールから解放されていた。人生で達成すべき目標も夢もないために、彼が守るべきもの、彼の行動を妨げるものは何もなかった。そうした『肖像』の中で自由に動き回るラルフの行動は、読者を含む、周囲の全ての人々に黙認されていた。なぜなら彼は「病人」であり、健康な人々とは違う世界の住人と見なされていたのである。

ラルフを区別し、周りとは差別化をしたことは、作家であるジェイムズの意図であった。彼の自由な行動が、『肖像』を組み立てる上で必要不可欠な要素となっていたからだ。病人の利用とその役割を確かめ、周囲の人々がラルフをどのように扱ったのかを考える。それは内面の「外」から見た彼の様子であり、「控えの間」に見えるラルフの姿である。一章では、作家と病人との関係を考える。

内面における「控えの間」を通り、その先の「私室」へと進んでみたい。ラルフの本心は、そこへ近づいたと思われる二人の人物、彼の父ダニエル・タレットと主人公イザベルを通して間接的に考える。『肖像』が常にイザ

ベルの意識を持って描かれたものであり、また役割を終える後半とともに、ラルフの登場が著しく減ってしまうからだ。深い関係を築いた二人との関係から、二章ではラルフの内面の奥にある心理を分析する。

タイトルで用いた「疎外」<sup>2</sup>とは、作家から為される、健常者からの病人の隔離である。精神疾患患者の社会的な疎外を指摘したのはフーコーであったが、ジェイムズもまた、『肖像』において患者に病名を与え、その隔離を正当化していた。小説の役割と目的を果たすため、作家によって健康な人々の世界から「疎外」された、ラルフの様子を見ていく。

## I. 病人ラルフ・タレットの疎外と役割

『肖像』は、当然のことながら、ラルフの心理を描くために書かれたものではない。初出から27年後に加筆修正された、ニューヨーク版の序文には、執筆当時を振り返るジェイムズが「主題の中心を若い女性の意識に置く」(AN 51)<sup>2</sup>ことから始め、「その土台の上にレンガをきちんと、注意深く、調和させて積み上げた」(AN 52)と述べている。中心にあったのは常にイザベルであり、それ以外の人物は皆、彼女を描くための脇役であった。彼らは「パズルのピース、『プロット』の具体的条件」(AN 53)、あるいは「馬車の車輪に過ぎず、決してその乗り物の本体に属し、一瞬でも中に座席を用意してもらうことはない」(AN 55)のである。イザベルを土台として考えられた『肖像』において、ラルフの内面が描かれなことは、構想の段階からわかりきったことであった。

「馬車の車輪」の一部とはいえ、ラルフの役割は重要であった。「心理的動機こそ、考える魅惑的な絵画的題材である」(AF 48)と考えるジェイムズは、イザベルを遺産目当てで近づくような男性と結婚させ、その悲劇の中で彼女の葛藤、複雑な心理を描こうとしていた。そのような「イザベル・アーチャーについての騒動」(AN 48)を起こすのは、6万ポンドもの大金を彼女に渡すラルフである。「[大金という]風に押されてイザベルが進む様を眺めたい」(PL 161)と彼女の夢を支えようとしたその行為は、皮肉

にも「お金もなく、名もなく、地位もない」(PL 283)、「狭量で自分勝手な」(PL 291) ディレットタント、ギルバート・オズモンドを彼女の結婚相手として呼び寄せてしまう。それは作家がイザベルの葛藤を描くために必要としたプロットの一つであり、ラルフに課せられた重要な役割であったのだ。

大金の譲渡は、深刻な病人であるラルフにしか果たせない役割であった。あらゆる所属と無縁である「ラルフは、いくつかの制限から自由である利点を持つ人物」(Leavis 150)とされていた。数年前までほとんど他人であった女性に無償で大金を渡すことができたのは、社会における様々な価値観、慣習から解放された、ラルフだけであったのだ。

「大金！」(PL 181)とマールが驚くように、6万ポンドは無償で人に与えるにはあまりに大き過ぎる額である。リディアは「そのお金は銀行に預けてあって、イザベルはその利子を引き出していけばよい」(PL 181)と述べているが、それは年間3千ポンドから4千2百ポンドに相当し、20世紀の額にしておよそ19万6千ドルから29万4千ドルに及ぶ(Schroer 82)。

「年に数百ドルしかなかった」(PL 160)以前の彼女の収入とは比較にならない。「1865～66年のイングランドやウェールズで年収5千ポンドを超える者が7千5百人ほどで—それは当時のかなり富裕階級であった」(Schroer 81)というから、当時の6万ポンドがいかに大きい額であったか想像できる。

ラルフが職業に従事していれば、このような行為はできなかつたかもしれない。『肖像』に登場するビジネスマン、ラルフの父で銀行家のダニエルや、アメリカ人の実業家、キャスパー・グッドウッドが、いずれもイザベルの将来の危機を察知しているからだ。6万ポンドは本来、ラルフが父から相続するはずの半分の額であった。ダニエルは姪にあたるイザベルに5千ポンドを残すつもりでいたが、増額を求める息子の「申し出を聞くと、顔にはビジネスマンの性質が消えておらず、ダニエル・タレットの人生の習性である隠れた鋭さが現れた」(PL 160)とある。彼はその鋭さをして、「6万ポンドを持った若い女性は、財産目当ての結婚をする者の犠牲になるのではと思わないか」(PL 162)とイザベルの未来を予見する。ブレア・

ケニーはジェイムズの描くビジネスマンの「特徴は、鋭敏さと素朴さの混合である」(51)と述べる。彼らはビジネス以外の世界に対して無知であるために「単刀直入の論理と正義を求める自然な本能」(52)を保っており、それらが直感的に危険を察知するというのだ。ケニーの指摘するように、グットウッドもまたオズモンドの「ある種の悪魔的な心」(PL 423)に気が付いている。これは病のため、一年余りで職を辞したラルフにはとても持ち得ない感覚である。

イザベルと出会う頃のラルフは、仕事とは全く無縁の存在である。彼女はラルフを「彼は有閑階級なのです . . . . 悲惨な健康状態にあって、仕事をする能力がないのです」(PL 83)と友人に紹介する。ラルフ自身もまた、ニコラ・ランクレ (Nicolas Lancret, 1690-1743) の絵を見ながら「僕は最も怠惰な男です . . . . これ[絵の中の紳士がニンフ像にもたれ、婦人たちに向かってギターを弾いている]が僕の理想的な定職ですよ」(PL 84)と述べ、働く能力ばかりか、意思、意欲も全くないことを明言している。ラルフは心身ともに仕事と離れた存在であるといえる。

ラルフの行為は父ダニエルにとって、銀行家としてだけでなく、同じ男性としても信じがたいものであった。「ラルフを育て、イザベルに似た、淫刺とした女性と結婚する能力のある」(Kenny 55) 父とすれば、「愛する、若く美しい女性と結婚することは、間違った主義から独り身でいることよりずっと自然なこと」(PL 159)であった。「ダニエルの考えでは、異性愛とは『自然な』社会の規範の一部であって、繁殖や資産の伝達をして歴史を超えることのできる能力を男性に授けてくれる」(Luciano 199)ものである。「彼女の帆に小さな風を送りたい」(PL 160)と述べるのみで、愛する女性に求婚せず、自分の子どもやタチェット家のことも考えない息子の行為は、同性として、ダニエルには「不自然」に感じられたに違いない。

ラルフには、母国であるアメリカの影響もあまり感じられない。「すべてではないにしろ . . . . アメリカを生き生きと体現する」(PL 87) ヘンリエッタは、鑄型にはまった母国の価値観から、「私は決して [イザベルに金を与えないように] と言っていたでしょうに！」(PL 187)とラルフの行為を

批判する。「生産的、生殖的な労力の含まれる明快なアメリカ民族の責任という意識」(Luciano 199)を持つ彼女は、仕事も結婚もしないラルフを「最低のヨーロッパ人」(PL 86)と呼んでいる。非アメリカ的、ヨーロッパ的であること自体に異を唱える彼女は、イザベルに「私はあなたがひどい快楽趣味にならないよう望んでいるの . . . . あなたが新しく得た大金は、あなたをこれまでよりもっと、我がままで心のない、幻想を持ち続ける人たちの中に閉じ込めてしまうでしょう」(PL 188)と述べるのである。ヘンリエッタを通して伝えられる、『肖像』での一部のアメリカ観からすれば、ラルフの行為は非生産を助長させる、危険なものでしかないのである。

「ヨーロッパ人」と見なされるラルフであったが、彼が当地の慣習や作法に囚われている様子は見られない。教育の極端を嫌った父の意向から、ハーバードとオックスフォード両方の教育を受けたラルフは、イギリスに住んでいても「周囲の慣習との外面的な調和は長く留まることがなく、それは自然に冒険や皮肉を好み、縛られない自由な鑑賞にふけさせる自立の謳歌をさせる、精神の仮面でしかなかった」(PL 44)。一方でもう長くアメリカを離れ、ヨーロッパに暮らすリディアは「過剰なマナーへの傾倒から、感情を干上がらせている」(Ward 50)。「慣習を知るのなら、受け入れなければならぬ」(PL 67)と述べる彼女は、イザベルが夜遅い持間、付き添いなしで男性と過ごすことを許すことができない。単に少しでも長い時間イザベルと一緒にいたいと願うラルフは、それが「正しいとわかっている、母[が就寝の時間をせまること]に苛立ちを感じる」(PL 67)のである。土地の慣習や教育の影響も受けないラルフは、物事を自由に考え、自分の興味、関心にしがたがって行動することができたのである。

フランク・リーヴィスが述べたように、ラルフの持つ精神の自由さは、彼にとっての「利点」であったのかもしれない。ラルフが自分の立場をイザベルに説明する場面がある。

僕にいくつかの特権がないのなら、あなたの従兄である利点は何でしょう？僕にいくらの埋め合わせもないのなら、見返りを望まずに

あなたを愛する利点は何でしょう？チケットを得るために高い支払いをしたのに、そのショーが見られないというのなら、病気で障害があって人生の試合の単なる傍観者に甘んじてきた僕の利点は何なのでしょう？

What's the use of being your cousin if I can't have a few privileges? What's the use of adoring you without hope of a reward if I can't have a few compensations? What's the use of being ill and disabled and restricted to mere spectatorship at the game of life if I really can't see the show when I've paid so much for my ticket? (PL 132) <sup>3</sup>

求婚をしてきたイギリスの貴族、ウォーバトン卿をどう思っているのか、ラルフがイザベルに問いただす場面である。社会のあらゆる活動から離れた彼にとって、イザベルらが生きる世界はショーであり、自分が傍観者となった、見世物のようなものだ。ラルフは自分が彼女の従兄であり、無償で愛情を与え、病人であるのだから、真意を自分に言うように主張する。自分の立場を利用して、イザベルの人生のショーを最大限楽しもうとするラルフの態度が見てとれる。

傍観者として他人の人生を観察することは、病後の身体の不自由がもたらした、ラルフのわずかな楽しみの一つであった。弱っていくにつれて、「いずれ失われることがわかると、単純に身体を使うことさえもこの上ない喜びとなり、そのうち、熟視の楽しみは今まで知りえないものとなった」(PL 46)と回想する彼は、自身の人生には何の見通しも持っていない。将来の確実な死を知るために、他人の人生が自分の目の前でどう面白おかしく展開していくのか、それを眺めることが彼の生きがいであったのだ。大金を与えることを「単なる楽しみのために聞こえるが」と父に問われたラルフは、「そう、とても大きなね」(PL 161)と事も無げに答えるのである。

観察以上の行為、イザベルに言い寄ったり求婚をしたりすることは、反対にラルフの楽しみを損なうものでしかなかった。それは彼にとって「表現



の暴走」(PL 46)であり、「致命的」な行動である。彼の態度を不思議に思うイザベルに、ラルフが答えている。

「私にプロポーズをするつもりですか？」

「決してそんなことはありません。僕の言う立場からすると、それは致命的なことで、僕にまたとないオムレツの素材を提供してくれるガチョウを殺すことになるでしょう。ガチョウというのは、僕のばかげた幻想の象徴です。」

“Are you thinking of proposing to me?”

“By no means. From the point of view I speak of that would be fatal; I should kill the goose that supplies me with the material of my inimitable omelettes. I use that animal as the symbol of my insane illusions. . . .”

(PL 133)

「(女性を)愛するという考えは、限られた将来図の中にもまだあったが、それは愛されることとは別であった」(PL 45)と考えるラルフは、自分が他人から愛される、という期待を一切持っていない。それは観察という、残された既存の楽しみを失う危険な行為でしかなく、「致命的」であるのだ。彼はイザベル自身を欲するのではなく、彼女の生み出す「またとないオムレツ」を毎日楽しみたいだけなのである。

病人である立場を利用し、わずかな楽しみに人生を見出したラルフであったが、その「利点」の最も大きな恩恵を受けていたのは作家のジェイムズであった。大金の譲渡は、『肖像』に欠かせないプロットの一つであったからだ。後期の小説『鳩の翼(The Wings of the Dove)』(1902)の序文に、病人のキャラクターとラルフについてジェイムズが述べる箇所がある。

どんな重い病人を扱わせても、病人が作家に訴えてくるのは生きるという行為によってであり、彼らに不利な状況を与え、葛藤を規定するほどに、彼らはより訴えてくるのである。生きる過程がその道

を困難とし、他のどんな関係よりも、取り残された地の上で彼らは輝くのだ。それに私は多様な記録者として、今まで二次的に身体の弱くまたは失敗のした者を、付属で病人であった人物を一批判を気にしない満足とともに登場させてきた。例えば『ある貴婦人の肖像』のラルフ・タッチェット、彼の哀れな健康状態は全く欠点などではなくて、彼が産み出す巧みな効果、肯定的な印象を、愉快さと鮮明さの直接の助けとして私は大変当てにしていたのだ。

Let him deal with the sickest of the sick, it is still by the act of living that they appeal to him, and appeal the more as the conditions plot against them and prescribe the battle. The process of life gives way fighting, and often may so shine out on the lost ground as in no other connexion. One had had moreover, as a various chronicler, one's secondary physical weaklings and failures, one's accessory invalids— introduced with a complacency that made light of criticism. To Ralph Touchett in “The Portrait of a Lady,” for instance, his deplorable state of health was not only no drawback; I had clearly been right in counting it, for any happy effect he should produce, a positive good mark, a direct aid to pleasantness and vividness. (AN 290)

ラルフを社会のあらゆる活動から離れた「取り残された地」に置くことで、作家はイザベルを描くための「直接の助け」を得ていた。イザベルの葛藤を起こすことが狙いであったジェイムズにとって、病人の存在はその環境を作るための、有用な手段の一つであったのだ。

病人の「肯定的な印象」とは、ジェイムズがラルフを利用するために施した工夫の一つである。小説の前半と後半で印象が変わらない彼に、読者の注目が集まることは少ない。病状は小説が進むほどに悪化していくが、ラルフはいつも冗談を絶やさず、ひょうきんで楽しい人物として通っている。いよいよという段階になり、危篤の知らせを受けて駆けつけたイザベルにも、「ラルフはいつもと全く同じです、ただ床に就いていて、はなは

だ病人らしく、話せないだけです。… それでもとても愉快でおかしく、変わらずに物わかりがよいのです」(PL 468)と伝えられる。最後まで同じ印象を保つことで、作家はイザベル以外の人物に、読者の注目が向かうことを防いでいたのである。

ラルフの病状があまりに深刻であったため、ジェームズの印象付けに少々無理があると思われる部分も少なくない。痛ましいのは足の衰弱で、「歩き回って仕事をするを好んでいた」(PL 45) 青年が、次第に真っ直ぐ歩けなくなり、車椅子から寝たきりになっていく様子は見るに耐えない。そうしたふらふらとつまずく歩き方が「滑稽な病人—自分の障害さえ冗談の一部にする病人である」(PL 285) という状況は少しイメージがしづらい。また「空気を食べて生きているみたい」(PL 294) とイザベルが言うように、ラルフがものを食べる場面はほとんどなく、衰弱から、彼の顔は「骨の格子だけ」(PL 476) になってしまう。それでも「イザベルはラルフの醜さを好み、ぎこちなさを愛しいと思うようになった」(PL 285) というのは、彼女が哀れんでいるか、皮肉を言っているようにも聞こえてしまう。

ジェームズは『肖像』発表当時の流行病であった結核を活用することで、ラルフの病を小説の中に自然と取り入れている。抗生物質ストレプトマイシンが1944年に発見される以前、結核ははっきりとした治療法がなく、日常的に見られ、「白いペスト」と恐れられた不治の病であった(福田 14)。ラルフが早々に人生を諦めて、衰弱しながら弱っていく姿も、当時に読者にはある程度共感のできる、馴染みのある光景であったと推測できる。

小説を構成する上で最も便宜を図ったのは、結核の転地療法の利用であったと思われる。『肖像』の場面設定である1870年代は、郊外の新鮮な空気や日光によって結核の治療を試みる、サナトリウム療法が確立した時代でもある(青木 35)。ラルフの活躍は主に従妹に遺産を渡す第一部までで、また何でも先を見通してしまう頭脳明晰な彼が居合わせると、構成上都合の悪い章も多い。不必要な場面で決まって体調が悪くなるラルフは、療養のために南イタリアやギリシアなど、遠く離れた南の地へ度々出かけていってしまう。『肖像』の場面はロンドンやローマ、フィレンツェなどの都市

部が多いが、ジェイムズは必要に応じて郊外から都市へと、ラルフを出し入れしながら小説を進行するのである。

当時「病名を聞くことが死刑宣告を聞くことに等しかった」(Sontag 7) 結核は、ラルフに人生を早々と諦めさせるためにも都合がよかった。彼の診断は「肺病患者の集まる気候に行けば、十数度の冬はしのげるかもしれない」(PL 45) とするのみで、治ることは始めから期待されていない。サナトリウム療法は安静を保ち、できるだけ症状を抑えようとする、延命措置でしかない(青木 36)。彼はイザベルに出会う以前から「自分の死期が見える範囲にあった」(PL 46) と自覚し、彼女の人生を遠くから眺めるだけの人物として登場するのである。

結核が突発的に死をもたらす病でなかったことも、ラルフの複雑な心理を形成するために役立っていた。結核菌の進行は遅く、他の不死病と比べると、病人である期間が非常に長い。病状は安定と悪化を繰り返しながら緩やかに進行し、1~10 年ほどかけてゆっくりと死に至り、場合によってはそのまま自然治癒することもある(青木 32)。ラルフは「それ[ひどい風邪]が肺に固着し、悲惨な混乱をもたらした」(PL 45) と、イザベルと出会う数年前に発病するが、それでも小説の終盤まで生き続けている。すぐに出かけた転地で「良い冬も悪い冬もあった」(PL 45) と数度の冬を過ごし、その後「この歴史の始まる出来事[イザベルと出会うこと]が起こる 3 年前に見込みは消えてしまった」(PL 45) とあるので、この時既に5年以上が経過している。イザベルがラルフの住むガーデンコートにやって来るのがその後の 1871 年の 4 月、彼が亡くなるのが 6 年後の 1877 年 5 月であるから、彼は病人として少なくとも 11 年以上は生きていることになる。結核はラルフにゆっくりと死の意識と人生の諦めを与え、心理を形成する十分な時間を作家に提供していたのである。

字面では数行の出来事であっても、ラルフが人生において「自身を卓越させていくという考えを諦める」(PL 46) ためには、非常に長い時間がかかっている。「オックスフォードで父を大喜びさせるほどの成績をあげ、周囲の人々にこんな頭の切れる者が銀行職につかないことは哀れだと言わし

めた」(PL 44) 有望な青年の将来は、「父の銀行の高い地位の座を占め」(PL 44) てから、一年半後の発病で潰えてしまう。望みのない結核患者の処置は早く、ラルフはすぐさま「職を辞め、治療に専念せよとの気の毒な命令を受ける」(PL 45)。その後不承不承転地先に向かい、「ロンドンからの追放のつまらなさを呪う」(PL 45) のである。「死人同然で、数週間生死の間にあった」(PL 45) 時を経験し、遂に全くの野心を諦めるのは、発病から少なくとも5年後の冬である。ラルフの人生の断念には、長期の苦しみと衰弱の末に死に至る、結核の典型的な症状が役立っている。

長い苦しみの末、以前の「自分とは何の共通点もない、退屈で無関心な人物」(PL 45)へと変貌したラルフは、ジェイムズのために『肖像』の中で自由に動き回る。仕事や異性への興味を奪われ、安住する地も与えられなかった彼は、主人公に大金を渡すという、作中での大きな役割を果たしていた。深刻な病に苦しみながらも、常に「肯定的な印象」を付加されていた彼は、「退屈なことは何もない、人生は楽しいことしかない」(PL 21) とさえ言うてのける。しかしながら、それは内面の「控えの間」に映る、「外」から見たラルフの姿でしかなかった。ジェイムズはラルフをあらゆる社会と無縁の「病人」としたことで、イザベルの葛藤を描くための適切な環境を作り上げていたのである。

## Ⅱ. 病人ラルフ・タレットの心理

ラルフの本心に最も近づいた人物は、父ダニエルとイザベルであった。父は肉親である以上に彼の「親友」(PL 44)、「親密な仲間」(PL 62) であり、イザベルは「私の兄さん！」(PL 479) と彼を呼ぶ、妹のような存在であった。ラルフの「控えの間」を通ったこの二人は、心の奥の「私室」に到達している。二人に共通した特徴を考えながら、ラルフが自分以外の人物に求めたもの、彼の深い心の様子を分析する。

ラルフとの関係において、ダニエルとイザベルには三つの共通点があった。それは互いが互いのことを認め、興味を持ち、尊敬をしていること、

人生の中で、深刻な不幸の苦しみを知っていること、そして互いがその不幸の経験を相談し、共有ができる間柄であることであった。この条件を満たしていた生前のダニエルと結婚後のイザベルは、いずれもラルフの「私室」に入ることが許された、彼にとっての特別な人物であったのだ。

ラルフは父を認め、尊敬をしている。拒絶を示す冗談が表れなかったのは父に対してのみで、「ラルフの持つわずかな敬意はすべて父に集中しており、その他に対して、彼の冷笑は自分にも、弱った肺にも、その無益な生活、風変わりな母、友達、帰化した国、母国、かわいい従妹イザベルにもこだわりなく行使された」(PL 61)。上述したようにダニエルは息子とは異なる価値観を持つが、ラルフが敬意を持ったのはその父の独自性にあった。

ダニエル・タチェットは、こと職業に関する限り天才で、ラルフ自身は銀行業の適性を全く欠いていたが、父が為した偉大さを計ることができる程度の技能は習おうとした。だが、より興味を持っていたのはその点ではなく、内部が侵食されることなく、イギリスの大気に磨かれた父の象牙のような精神の表面であった。．．．ラルフは父が推測さえしない考えで頭が一杯であったが、[アメリカにもイギリスにも染まらない]父の独創性に高い敬意を払っていた。」(PL 44)

Daniel Touchett, to his perception, was a man of genius, and though he himself had no aptitude for the banking mystery he made a point of learning enough of it to measure the great figure his father had played. It was not this, however, he mainly relished; it was the fine ivory surface, polished as by the English air, that the old man had opposed to possibilities of penetration. . . . Ralph, whose head was full of ideas which his father had never guessed, had a high esteem for the latter's originality.

(PL 44)

自分にはない才や能力、価値を認めるラルフは、ビジネスの才と外国にあって母国の精神を忘れない、しっかりと己を持つ父を、心から尊

敬していたのである。

他人への尊敬を必要としたのは、ラルフが観察の楽しみを生きる動機としていたからでもある。その対象は、彼にとって、眺める価値のある人物でなくてはならなかった。「ラルフは父を好んでいただけでなく、尊敬をしていて一彼は父を観察する機会を楽しんでいた」(PL 44)。イザベルが現れる前は、ダニエルだけがその唯一の対象であったのだ。したがって父が自分より先に死ぬことを知ったラルフは、「生きる動機と共に、その源までも失った」(PL 63)と絶望する。ラルフにとってのダニエルは、生きがいの供給源であり、「父がいてくれる励みなしに、自分の順番を待つことはとても耐えられない」(PL 63)ことであった。

父はラルフの病に共感してくれる無二の存在でもあった。「痛風が足にきており、それがより致命的な部位に到達し始めた」(PL 62)ダニエルは、イザベルの現れる頃には、息子と同様、既に将来のない人生を送っている。タレット父子は冒頭の場面より、「われわれ二人は足の不自由なあひるだ」(PL 21)と患者同士の仲間意識を見せる。二人とは対照的に「顔色が生き生きとして、色白で率直、しっかりとした容貌」(PL 19)のウォーバトン卿は、今までシック(病氣)であったことがあるかとダニエルに問われ、「はい、一度ペルシア湾でシック(船に酔って吐いた)に」(PL 21)、と冗談を飛ばすほど健康には無関心だ。『肖像』の中でラルフ以外に病を持ち、先のない人生を送っている人物はダニエルしかいない。父はラルフの不幸の知、病の苦しみを理解する唯一の人物であったのだ。

ラルフは父に対し心を開いている。何でも率直に話ができることはもちろん、その雰囲気は傍から、二人が黙して「互いが顔を見合すその瞬間見れば、彼らが父と息子なのだと容易に分かった」(PL 20)ほどである。同じ家族であっても、母リディアに対する態度は父と正反対だ。独立心の強い彼女は人生のほとんどを外国で暮らし、「息子と過ごすのは年間で三ヵ月」(PL 43)程度しかない。「母は何事も一人でするのが好きで、助けてもらうという考えがなく、僕を糊のない切符くらい意味のないものとみなすのです」(PL 25)と述べるラルフは、彼女を頼りにしたり、本心を話した

りすることは一度もない。「子として頼りたいと思うのは父のほうで、父はラルフにとってより母的な存在で、母は一方で父的であった」(PL 43)。互いを尊敬し、辛いことも隠さずに話ができる人物は父だけであったのだ。

父の死が迫っている今、ラルフはガーデンコートに現れたイザベルが、ダニエルに代わる存在となってくれることを期待している。彼女が養子としてタレット家にやってきて、ずっと一緒に住んでくれるのだと勘違いするのである。

「なるほど」ラルフは言った「母はあなたを養子にしたのですね。」  
「養子にしたですって？」少女は目を見開き、再び顔を赤らめ、ラルフを動揺させる苛立ちの表情を一瞬見せた。．．．「違います。叔母は私を養子にしたではありません。私は養子の候補ではありません。」

「これは失礼をしました、」ラルフは小声で述べた。「僕が言ったのは一その一彼は自分の言った意味が分からなくなってしまった。

“I see,” said Ralph. “She[Lydia] has adopted you.”

“Adopted me?” The girl stared, and her blush came back to her, together with a momentary look of pain which gave her interlocutor some alarm. . . . “Oh, no; she has not adopted me. I’m not a candidate for adoption.”

“I beg a thousand pardons,” Ralph murmured. “I meant—I meant—” He hardly knew what he meant. (PL 30)

「私は自由を好みます」(PL 30) と、強く独立心を主張する彼女にラルフはたじろぐ。イザベルが何でも話ができる父とは正反対の、どちらかと言えば母リディア近い人物であったことに驚き、困惑するのである。期待を裏切られたラルフの様子が窺える。

「私室」に入る人物として不適格とされたイザベルは、ラルフにとっての単なる観察対象となってしまった。それは尊敬の伴わない、興味本位か



らの観察である。彼女はダニエルいない人生における、当座の「生きる動機とその源」(PL 63)であり、父の代用品のような存在であった。

ラルフの当初のイザベルに対する態度は、美術品に対するそれと近い。「従妹は楽しみ以上のものではないとしても、それは高い等級の楽しみ」(PL 63)で、それは眺める価値があり、かつ自分とは全く無関係な存在であった。初対面のときから、ラルフは「突然郵便受けに壁にかけるためのティツィアーノの作品が—もしくは暖炉に飾るためのギリシア浅浮き彫が届いたんだ」(PL 63)と、彼女を芸術と同化させている。また婚約をやめさせようと説得する時のラルフは、フィレンツェの母の邸宅の「テルプシコラー像—ジョヴァンニ・ベルニーニの手法で先細の指と膨らんだひだのある踊るニンフ像の下に座り」(PL 287)、イザベルを待ち受ける。それは作品としての価値を大いに減じようとする彼女に、鑑賞者の立場から無言の抗議をしているように見える。ラルフは彼女に美術品に求めるような、観察の楽しみに特化した価値を見出していたのである。

当時のラルフは、イザベルを自分と対等な存在とは思っていない。彼の内面の彼女は、崇めるべき芸術品であり、自分は哀れな病人である。「多大な想像力を持ち」(PL 160)、「世界に身を投じたい」(PL 134)と考える(そうイザベルが考えているとラルフが解釈した)彼女を、ラルフは自由に大空を舞う鳥に例えている(Holder-Barell 129)。そしてオズモンドと婚約をすることを「檻に入れられた」(PL 288)、飛翔する彼女が空から「落ちた」と表現する。

「落ちた、とおっしゃいました？」

「ええ、あなたに起こったことをそう表現するのです。僕にはあなたは青空の中高く舞い上がって一男たちの頭上、光の中を飛んでいるように思えたのです。すると突然誰かが色あせたバラのつぼみを放り投げ—あなたには決して届かないはずの飛び道具なのに—あなたはまっすぐと地に落ちるではありませんか。僕は傷ついたのです」ラルフは大それたことを言った、「僕は自分自身が落ちたかのよ

うに傷つきました！」

“Come down, you say?”

“Well, that renders my sense of what has happened to you. You seemed to me to be soaring far up in the blue—to be sailing in the bright light, over the heads of men. Suddenly someone tosses up a faded rosebud—a missile that should never have reached you—and straight you drop to the ground. It hurts me,” said Ralph audaciously, “hurts me as if I had fallen myself!” (PL 291)

「まるで自分が落ちたように」と述べるラルフは、芸術を鑑賞し、自分もその想像力を借りて空高く舞い上がる夢を見ている。心の中での二人は絶対的な美とその鑑賞者であり、上下の関係を築いている。それは父との間に見られた対等な、互いを思いやる関係とは程遠いものであった。

二人が対等な関係を築くのは、イザベルが結婚した後である。オズモンドとの婚約、空からの「落下」が、ラルフの「ばかげた幻想」(PL 133)、二人の上下の関係を破壊したからだ。彼女を芸術として崇めることをやめたとき、ラルフは彼女を同じ地に立つ人間として認め、再び心の共有を図るのである。

ラルフとイザベルの関係性の変化は、婚約の前後で同じ構図を見せる、二ヶ所の異なる建物の階段室の場面に絵画的に示されている。出会った当初、ガーデンコートで屋敷が所有する美術品を見て回り、玄関ホールで別れる場面では、理想に燃えるイザベルと、それを助けるラルフの上下の関係が見てとれる。

ロウソクを受け取り、オーク材の階段に足を乗せたイザベルは、ラルフの方をちらと見た。

「そう」彼女は言った、「私はそのためのヨーロッパに来ました、できるだけ幸せになるために。おやすみなさい。」

「おやすみ！きみが成功すればと思います、その助けができれば幸

いですよ！」

イザベルは向きを変え、ラルフは彼女がゆっくりと階段を上る様を眺めていた。それから手をポケットに突っ込むと、自分は空の応接間に戻った。

She looked at him a little; she had taken her candle and placed her foot on the oaken stair. “Well,” she said, “that’s what I came to Europe for, to be as happy as possible. Good-night.”

“Good-night! I wish you all success, and shall be very glad to contribute to it!”

She turned away, and he watched her as she slowly ascended. Then, with his hands always in his pockets, he went back to the empty drawing-room.

(PL 52)

婚約発表後、フィレンツェのリディア宅の階段室では、ラルフの説得が失敗し、仲違いをした二人が別れていく、左右の関係が見てとれる。

「私が困ったことになっていると思っているのですか？」

「誤りを犯しているのであれば、そうでしょう。」

「けっこう」イザベルは言った、「あなたにはもう悩みを打ち明けません！」彼女は階段を登り出した。

ラルフはポケットに手を入れて立ったまま、その様子を目で追った、そのとき高い壁の中庭で待っていた冷たい風に打たれ、身震いをした、やはりフィレンツェの日の光を朝食代わりにしよう、そう思い彼は庭に戻った。

“Do you think I’m in trouble?”

“One’s in trouble when one’s in error.”

“Very well,” said Isabel; “I shall never complain of my trouble to you!”

And she moved up the staircase.

Ralph, standing there with his hands in his pockets, followed her with his

eyes; then the lurking chill of the high-walled court struck him and made him shiver, so that he returned to the garden to breakfast on the Florentine sunshine. (PL 294)

いずれも階段を進むイザベルと、それを眺めるラルフの場面であるが、読者に与える印象は対照的である。「できるだけ幸せになるために」階段を上がるイザベルと、それを見守るラルフの関係が見られたガーデンコートに対して、フィレンツェでは二人の対立、開いていく左右の距離が想起される。階段は上下へと進むほどに、左右の距離が離れていく移動でもある。足の悪いラルフは、一人で階段を上がることも、彼女を追うこともできなかった。この二ヶ所の階段室の場面は、婚約を機に上下から左右へと印象を移行した、ラルフの内面における、二人の心の関係性の変化を視覚的に表現している。

一人の人間として認められ、「私室」に入るための最初の条件を満たしたイザベルは、オズモンドとの生活からその第二の条件、人生の不幸の知を手に入れる。「オズモンド氏は思いやりがあり、親切で、高邁な精神の持ち主」(PL 293)と勘違いした彼女は、後に自分が「彼に驚くべきほど多くの未来像を持ち、魅了された思考やかきたてられた空想を育ててしまった！」(PL 357)と内省している。「彼の持つ教養や鋭さ、感じのよさ、善良さや才能、人生の知の下には、花咲く河岸にひそむ蛇のような利己主義があった」(PL 360)と気づくのである。夫の狭量さと世俗さに従うことを強要された「彼女は、自由や自分の選んだことをすること、他人の生活の見た目や名前を気にかけないことの大儀を訴える」(PL 361)。しかしながら、自分と違う意見を端から受けつけない夫は、自由を唱えるイザベルを、ただ憎むだけであった。会話さえなくなる「彼らの結婚は奇妙なもので、ひどい生活」(PL 363)となる。気兼ねなく話ができただヘンリエッタには、「そう、私は不幸だわ」(PL 407)と彼女は本心を自白する。イザベルはオズモンドと結ばれたことで、ラルフと共有し得る、人生の不幸の知を手に入れたのである。

イザベルの結婚の不幸は、ラルフの病気の不幸に相当するものとされている。それは二人に不幸を知るものしか見えないとされる、ガーデンコートの幽霊を目撃させることで明確に示されている。婚約の以前、幽霊の話  
をせがむイザベルをラルフが諭す場面がある。

ラルフは悲しそうに頭を振った。「お見せしても、あなたには見えな  
いでしょう。それは誰にでも見えるものではなくて、見えても羨む  
べきものなんかではありません。あなたのように若くて、幸せで、  
無垢な人には決して見られないのです。まず苦しんで、それも深刻  
なやつをです、それで不幸の知を得なくてははいけません。するとあ  
なたの目が開かれるでしょう、僕はずいぶんと前に見ましたが」ラ  
ルフはそう言った。

Ralph shook his head sadly. "I might show it[the ghost] to you, but you'd  
never see it.

The privilege isn't given to everyone; it's not enviable. It has never been  
seen by a young, happy, innocent person like you. You must have  
suffered first, have suffered greatly, have gained some miserable  
knowledge. In that way your eyes are opened to it. I saw it long ago," said  
Ralph. (PL 52)

ラルフは5年以上も前にその資格を得ている。「イザベルがその[幽霊を  
見る]必要条件を満たしていた」(PL 479)のは、夫の家を出て、再びガー  
ドンコートに帰ってきた、ラルフが死を向かえる夜であった。呼ばれたよ  
うな気がして、ベッドから起きた彼女は「部屋のぼんやりとした暗闇の中、  
漠と浮遊する人影 . . . . ラルフの白い顔—優しい目」(PL 479)を見るの  
である。幽霊となった彼と目を合わせた彼女は、二人で同じ視界を共有し  
ている。イザベルの不幸の知は、ラルフのものに匹敵するものとされて  
いる。

ラルフが父と病気の不幸を共有したように、イザベルもまた、ラルフと

その不幸を共有したいと願っている。オズモンドの正体を知った彼女は、内省の中でラルフが父に対してしたことと、同じ思考過程を辿っている。

ラルフがついに死の間際にあり、もう二度と会えないのだと思うと、イザベルは今まで知りえなかったほどに愛情を感じた。今や喜びなど何もない、人生を捨ててしまったことがわかった女に、どんな喜びがあるか？心にはいつも重荷がのっけていて、万物が土色に輝いていた。でもちょっとしたラルフの所への訪問が暗闇の中の光明だった、彼のそばにいる間は自分の痛みが自分のものではなく、彼のために苦しんでいるのだと思うことができた。今ではラルフは自分の兄のように思っていた。兄などいたことはないのだが、でももしも本当に兄がいて、その彼が死の間際にいるとしたら、それは今のラルフと同じくらい愛おしい存在であったろう。

She believed he was dying at last and that she should never see him again, and this gave her a tenderness for him that she had never known before. Nothing was a pleasure to her now; how could anything be a pleasure to a woman who knew that she had thrown away her life?

There was an everlasting weight on her heart—there was a livid light on everything. But Ralph's little visit was a lamp in the darkness; for the hour that she sat with him her ache for herself became somehow her ache for him. She felt to-day as if he had been her brother. She had never had a brother, but if she had and she were in trouble and he were dying, he would be dear to her as Ralph was. (PL 363)

事の真相を知り、「全く不思議、なんて驚くべき知性！」(PL 364)と、先にオズモンドの正体を言い当てていたラルフの明晰さを認めた彼女は、今度は死を迎える彼の不幸を意識する。そして彼を「兄」とする無償の愛情を持って、自身の不幸を彼と共有することを願うのである。それは父の精神性を認め、病の不幸を共有したラルフに通ずるものがある。不幸の共有

は二人の共通の願いとなったのである。

ラルフを「兄」とする思いにもかかわらず、イザベルが「オズモンドの妻であれば、ラルフと友達であることはありえない」(PL 327) ことであった。不幸をラルフに打ち明けることは、彼女の恐れる離婚を示唆していたからだ。かつての自分の決断である結婚、その「最も重大な行為—一生涯で唯一の神聖な行為を否定すること、それに比べれば他のどんなこともましに思う」(PL 386) イザベルは、不幸を公にすること自体に抵抗を持っている。またその思いがどうであれ、「彼女に精神の自由を持って欲しくない夫は、ラルフが自由の使者であることをよく知っていた」(PL 386)。そのため、ラルフと交友を続けること自体が、夫婦の不仲の原因となったのである。「互いに大目に見ることも、歩み寄ることも、簡単にすべてを忘れることも、正式に再調整することもありえない」(PL 386) この夫婦の間では、イザベルは離婚の危険を冒すことなく、ラルフとの距離を縮めることはできなかったのである。

板挟み状態にあるイザベルの状況を知るラルフは、彼女を自分の中に引き入れるため、オズモンド家の破壊を試みている。「彼女が夫の不平を言うのを聞きたい、そんな残忍な欲望」(PL 389) を持ったラルフは、夫婦を仲違いさせるためにイザベルの義理の娘、パンジー・オズモンドを利用する。このときイザベルは、結婚に対する自分の不幸の悩みばかりでなく、もう一つの矛盾関係に悩まされていた。貧乏な青年に恋をする純真なパンジーに、夫から別の男性、資産家ウォーバトン卿との仲を取り成すよう依頼をされていたのである。パンジーの恋心にも、夫からの命令にも逆らえない彼女は、その悩みをラルフに相談する。「あなた方夫婦は全く意見が合わないのですね」(PL 389) と率直な意見を述べながらも、婚約の説得に失敗して以来、イザベルが自分からの助言を素直に受け取らないことを知るラルフは、その矛先を話題となっているパンジーへ向ける。

「その関心からオズモンド氏がなんと申すかわかりますか？」イザベルの手をとり、ラルフは尋ねた。彼女はそっけなく首を振る—や

めさせようとする様子もない—それで彼は続けた。「あなたの[資産家との仲介に対する]熱心さの不足は、嫉妬のせいだと彼は言うでしょうね。」ラルフは彼女が心配をさせるような顔をしたので少し止まった。

「嫉妬？」

「娘さんへの嫉妬です」

イザベルは顔を赤らめ、そむけた。「やさしくないわ」彼女はラルフが聞いたことのないような声を口にした。

“Do you know what his interest will make him say?” he asked as he took her hand. She shook her head, rather dryly—not discouragingly—and he went on. “It will make him say that your want of zeal is owing to jealousy.” He stopped a moment; her face made him afraid.

“To jealousy?”

“To jealousy of his daughter.”

She blushed red and threw back her head. “You’re not kind,” she said in a voice that he had never heard on her lips. (PL 390)

義母と娘との関係悪化を試みるラルフは、全く存在の根拠のない「夫に対する娘への嫉妬心」を指摘し、彼女の内面を混乱させる。その目論見は成功し、抱えてきた悩みをただ乱暴にかき乱された彼女は、真意を確かめようとその足で娘の部屋を訪ねてしまう。挑発的な意見を吹き込み、オズモンド家内部の不和を起こそうとした、ラルフの残忍な試みが見てとれる。

「仮面の下にあるイザベルの自然な顔を見たい」(PL 389) と願うラルフは、パンジーをしてイザベルに夫の裏切りをさせた。「ギルバート・オズモンドを表象しているとしかいいえない」(PL 331) その仮面をつけ、「オズモンド夫人」を演じるイザベルにとって、「パンジーのこの上ない純真さ、イザベルが判断していた以上のあまりの無垢さ」(PL 391) が脅威となったのだ。娘の前で夫の意向である、金や世間の話をすることは大きな苦痛であった。



「お父様はよりよい結婚をするようあなたに望んでいるの」イザベルは言った。「ロウジアさんの財産は少しも多くないのよ。」

「よい結婚とはどういう意味でしょう—もしその少ない財産で十分だとしたら？ 私自身はほとんどお金を持っていないのですから、どうして私が財産を求められましょう？」

「あなたがお金を持っていないから、もっと求めることが理由になるのです。」イザベルは部屋の薄暗さをありがたいと思った、自分の顔が醜悪なほど誠意のないものを感じていたからだ。これはオズモンドのためにしていること、夫のためにしなくてはいけないことなのだ！パンジーの真面目な眼差しと目が合うと、イザベルは恥ずかしくなった、娘の選択を軽んじる自分を恥ずかしく思ったのである。

“Your father would like you to make a better marriage,” said Isabel. “Mr. Rosier’s fortune is not at all large.”

“How do you mean better—if that would be good enough? And I have myself so little money; why should I look for a fortune?”

“Your having so little is a reason for looking for more.” With which Isabel was grateful for the dimness of the room; she felt as if her face were hideously insincere. It was what she was doing for Osmond; it was what one had to do for Osmond! Pansy’s solemn eyes, fixed on her own, almost embarrassed her; she was ashamed to think she had made so light of the girl’s preference. (PL 393)

ラルフの前では平気で身につけていたその仮面も、娘を前にイザベルは「醜悪なほど不誠実」と嫌悪する。その顔を恥じてしまった彼女は、「パパよりもあなたの助言がほしい . . . . それはあなたが女性だから」(PL 391)、「お母様は私がどうすべきだと思っているのですか？」(PL 393) との娘の率直な問いに答えることができない。困惑して、「お父さんにそう[青年と結婚がしたいと]言ってみたら」(PL 394) と逃げる彼女は、純真な少女の目をして、自分の立場の矛盾さと不浄さに直面させられる。それは自分の

心の中に巢食う、夫への嫌悪に繋がるのである。

イザベルに内面の裏切りをさせたラルフは、次に彼女をオズモンド家の屋敷の外に連れ出さなくてはならなかった。屋敷は夫が装飾する趣味の集合体で、その中にいる以上、イザベルの自由は許されていなかったからだ。収集品の一部としてのイザベルには、家の「内部を人にねたまれるような聖域で囲み、除外をする感覚をもって周囲をいらだたせ、彼の家は他とは違うのだと思わせる、冷たい彼の独創性を世間に示す」(PL 331) 効果が期待されていた。妻は世間に示すための、重要な飾りの一部であったのだ。その俗な動機は部屋の雰囲気全体に表れており、趣味の集められた部屋に通されたパンジーを思う青年は、「そこはとても下品で、冷えびえとした感じがし、同じようなことはパンジーも考えた」(PL 312) とある。イザベルが自分の声を取り戻すには、彼女を屋敷の外に出すことが不可欠であった。

ラルフはイザベルを屋敷から出すために、自分の死を演出する。死を迎えるにあたって、「自分の家で死にたい—父を見送った大きく静かな部屋に体を広げ、夏の夜明けに目を閉じたい」(PL 415) と述べる彼は、屋敷のあるローマを離れ、ガーデンコートの自宅に戻る。いよいよ危篤の状態となったとき、彼は母にその電報を打たせ、彼女をイギリスに呼び寄せることに成功するのである。脱出は容易なことではなく、イザベルは婚約をする以前、オズモンドの屋敷に初めて足を踏み入れたときから、そこは「危機をはらんだ、強固な何かがそこにあり、一度入ると、相当の気力がなくては外に出られないみたい」(PL 217) と直感している。立ちほだかるのはやはり夫オズモンドの存在で、ラルフを見舞うこと、「ローマを去ることは極めて意図的な、計算された離反だ」(PL 445)と、彼は裏切りと離婚をたてに、イザベルを脅迫するのである。結局見舞いに行くことを決めた彼女は、それは夫との「決裂以外の何ものでもなかった」(PL 447) と述べる。ラルフは最後の別れ、自分の死を彼女を惹きつける理由として利用し、イザベルに自分かオズモンドかの選択を強いたのである。

「オズモンド夫人」としての束縛から解放されたイザベルは、ついにラルフの「私室」に到達する。「成功した人生ではなかった」(PL 473) と息

子を哀れむリディアに対して、イザベルは「それ[ラルフの人生]は美しいものでした」(PL 473)と彼の人生を肯定する。「休息について考えるならば、死こそ完全な休息ではないだろうか、とラルフを羨んだ」(PL 465)彼女は、彼の死にゆく運命さえ受け入れるのである。死の床の場面では、互いを認め、不幸を共有する、二人だけの精神世界を見せている。

「イザベル」ラルフは急に続けた、「きみにとっても人生が終わりであつたらと思うよ。」彼女は何も言わず、すすり泣き始め、顔を伏せた。泣き声を聞きながらラルフは黙って横になり、ついに長いうめきをあげた。「ああ、きみが僕のためにしてくれたことは何であつたらう？」

「あなたが私のためにしたことは何であつたでしょう？」顔を伏せていたので、動揺した泣き声は押し殺されていた。イザベルはすべての恥、事を隠そうとする願いを忘れた。彼に知ってもらわなくてはならない、知ってほしい、それが二人を完全に結合するのだ、彼は苦痛の境地を超えてしまっているのだから。

“Isabel,” he went on suddenly, “I wish it were over for you.” She answered nothing; she had burst into her sobs; she remained so, with her buried face. He lay silent, listening her sobs; at last he gave a long groan. “Ah, what is it you had done for me?”

“What is it you did for me?” she cried, her now extreme agitation half smothered by her attitude. She has lost all her shame, all wish to hide things. Now he must know; she wished him to know, for it brought them supremely together, and he was beyond the reach of pain. (PL 477)

この時のラルフは、自分がしたことではなく、イザベルが自分にしてくれたことを初めて相手に問うている。それは今まで父にしか見せたことのない「子として頼りたいと思う甘え」(PL 43)であり、自分が愛されることを彼女に望むのである。恥や隠蔽を忘れたイザベルもまた、同じ気持ち

から同じ問いで彼に答えている。互いを認め、人生の不幸の知を知り得た二人は、内面の奥深くでそれらを共有し「完全に統合」するのである。

ラルフが見せるイザベルへの愛の形は、ここへきて父ダニエルに対するものとは異なる様相を見せる。ラルフは「二人で同時に死ぬるのならば、申し分ない」(PL 63) と、父とは不幸とともに、死さえ共有することを望んだが、イザベルには生き続けることを願っている。「人生にはいろいろなことがある、きみはまだ若い」(PL 479) と述べる彼は、彼女の方から休息としての死を羨んだにもかかわらず、犠牲的に一人で死ぬことを求めている。

「死はきみのためのものではない—違うよ。他人の死を見るときほど、自分の生を感じることはあるまい。生命の感覚—自分が残っているという感覚だよ。僕も持っていたことがある—この僕でもね。でも今はその感覚を他人に与えること以外に、自分の役立つことはない。僕は終わりなんだ。」

“Not for you—no. There’s nothing makes us feel so much alive as to see others die. That’s the sensation of life—the sense that we remain. I’ve had it—even I. But now I’m of no use but to give it to others. With me it’s over.” (PL 477)

苦心して呼んだイザベルを、今度は「私室」から追い出し、自分の部屋が崩れていく様を外から見せることで、彼女に「生命の感覚」を与えようとしている。死をもって再び孤独になることを望むこの感情は、すべての共有を求めた父に対するものとは明らかに異なる。それはイザベルが「私の兄さん！」(PL 479) と呼ぶような兄妹愛、あるいは彼が今まで見せたことのない、異性への愛であったのかもしれない。ラルフは死の間際にして、イザベルに他の誰に対しても持ったことのなかった、特別な形の愛情を抱くのである。

## 結論

イザベルの複雑な心理を描くことを目指した『肖像』において、ラルフは健康な人々の世界から「疎外」をされる運命にあった。その世界からの除外が、一人の女性に巨額の大金を無償で与えるという、常識からはずれた行動を可能にしたのだ。過去を反省し、板挟みの中で葛藤する女性の意識を描く状況を作るため、ラルフは他の登場人物とは異なった、長い苦しみと衰弱、死の意識と人生の諦めを持つ「病人」でなくてはならなかったのだ。

ラルフの心理を知るには、病人を健常者から区別した、ジェイムズの意図を理解しなければならなかった。「とても愉快でおかしく、いつも物わかりがよい」(PL 468)という彼の「肯定的な印象」(AN290)は、作家の提供した彼の「控えの間」(PL 61)の姿でしかなかったからだ。彼の病であった結核もまた、身体的、精神的に彼を周囲から引き離す、「疎外」の手段の一つであった。転地療法や長期に及ぶ闘病、不治の病であった結核の特徴が、作家の便宜を図ったのである。ラルフを「病人」として遠ざけ、健常者の立場から彼を見ている限り、「控えの間」の先にある、彼の本当の心理を捉えることは困難であった。

病人を利用したジェイムズの目的と方法を確認し、改めて『肖像』をラルフの心理を探る小説として読み直した。彼の深い内面に存在する「私室」(PL 61)に到達した二人の人物、父ダニエルとイザベルとの関係から、ラルフが自分以外の人間に、真に何を求めていたのかを考えた。二人には三つの共通点があった。それはラルフと互いの持つ自己を認め、尊敬がし合えたこと、人生における、深刻な不幸の知を持っていたこと、そして互いにその不幸を打ち明け、苦しみを分かち合える間柄であったことだ。そしていよいよラルフの人生が終わろうとしたとき、彼はイザベルに対し、他の誰にも持ち得なかった、特別な形の愛情を抱く。それはすべての共有を求めることを超えた、犠牲的な愛であった。以上が『肖像』から読むことのできた、病人ラルフの心理である。

注

<sup>1</sup> ジェイムズの小説、評論の題は以下のように略記する。

“The Art of Fiction.” AF

*The Art of the Novel.* AN

*The Portrait of a Lady* PL

<sup>2</sup> 「疎外」は『精神疾患とパーソナリティ』の中の用語から。本論文の基本的な展開、着想はフーコーより得ている。

<sup>3</sup> 引用部分の邦訳は『ある貴婦人の肖像』行方昭夫訳、『ヘンリー・ジェイムズ「ニューヨーク版」序文集』多田敏夫訳を参照した。その他については拙訳。

引用文献

一次資料

James, Henry. *The Portrait of a Lady*. 1881. New York: Norton, 1995. 『ある貴婦人の肖像』 行方昭夫訳 岩波書店 1996年

---. “The Art of Fiction.” *Selected Literary Criticism*. Ed. Morris Shapira. London: Heinemann, 1963. 49-67.

---. *The Art of the Novel*. New York: Scribner's, 1962. 『ヘンリー・ジェイムズ「ニューヨーク版」序文集』 多田敏夫訳 関西大学出版 1990年

二次資料

Edel, Leon. “A Band of Egotists.” *The Life of Henry James*. New York: Penguin, 1977. 611-24.

Foster, Thomas C. *How to Read Literature Like a Professor: A Lively and Entertaining Guide to Reading Between the Lines*. New York: Harper, 2003.

Kenny, Blair G. “Henry James’s Business Men.” *Colby Quarterly* 9 (1970): 48-58.

- Grenander, M.E., Beverly J. Rahn, and Francine Valvo. "The Time-Scheme in *The Portrait of a Lady*." *American Literature* 32 (1960): 127-35.
- Habegger, Alfred. "The Fatherless Heroine and the Filial Son: Deep Background for *The Portrait of the Lady*." *New Essay on The Portrait of a Lady*. Ed. Joel Porte. Cambridge: Cambridge UP, 1990. 49-93.
- Holder-Barell, Alexander. *The Development of Imagery and its Functional Significance Henry James's Novels*. New York: Haskell, 1966.
- Leavis, F. R. *The Great Tradition: George Eliot, Henry James, Joseph Conrad*. London: Chatto, 1962.
- Luciano, Dana. "Invalid Relations; Queer Kinship in Henry James's *The Portrait of a Lady*." *Henry James Review* 23(2002):196-217.
- Schero, Elliot M. "How Rich Isabel Archer?" *The Henry James Review* 20 (1999): 81-88.
- Sontag, Susan. *Illness as Metaphor; and, AIDS and Its Metaphors*. New York; Picador, 2001.
- Ward, J. A. *The Imagination of Disaster: Evil in the Fiction of Henry James*: U of Nebraska P, 1961.
- 青木正和 『結核の歴史：日本社会との関わりその過去、現在、未来』 講談社 2003年
- フーコー、ミッシェル 『精神疾患とパーソナリティ』 中山元訳 筑摩書房 1997年
- 福田真人 『結核の文化史 近代日本における病のイメージ』 名古屋大学出版 1995年